



焼し屋

V-DAY

舞

麗

辞

表紙イラスト
秋月からす

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『壊し屋ルーディー』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



壊し屋

ル・ブレイ

舞麗辞

表紙 / 秋月からす

登場人物紹介

Characters

ルーディー

検挙率 100%を誇る、宇宙連邦警察の捜査官。若くしてかなりの功績を上げているものの、その向こう見ずな性格から「壊し屋」と敵味方問わず揶揄されている。

バロス

銀河系最大の密輸組織を牛耳る犯罪者。

「ここまでくりやひとまず安心か……ククッ」

小隕石の密集する宇宙空間の中。スペースシップの操縦桿を握りながら、男は低い笑い声を上げた。

年齢は20代後半か。筋肉質で身長は2メートルを超えるかなりの大男だ。

髪はブロンドの短髪で、整った顔立ちをしている。

しかしその表情からは、内側から滲み出る凶悪さのようなものが垣間見えていた。

名前はバロス。その名前と顔は、このヴィルヴァーナル宇宙海域ではそれこそ子供から老人まで知らぬ者などいない有名人だ。ただし——宇宙連邦警察の最重要指名手配犯として、であるが。

銀河系最大の密輸組織を牛耳るこの男が逮捕された八日前には、ヴィルヴァーナルにある五十万のTVチャンネルすべてが——銀河連邦皇帝崩御のときさえカートゥーンを流し続けていたあのチャンネル・トゥエルブまでもが——放送内容を差し替えたほどだ。

しかし裏社会きつての大物は、神が世界を造りそして休まれたより一日多いだけの日数で、あの堅牢極まる宇宙連邦刑務所を脱獄してしまった。

拳句にはその日、納入されたばかりの最新鋭スペースシップを略奪し逃亡を図ったのである。

「さすがにもう追っ手は来ないらしいな……まあ脱出間際に俺様が他の船はあらかたブツ壊

してやったから当然か」

満面の笑みで独り言を呟くブロンドの凶悪犯。だが次の瞬間その笑いは凍りつく。ピピピピピピ……!! 艦内にこだまする電子音。レーダーが船に近づく不審物を捉えたのだ。

視線を投げたスクリーンの上には、赤いポイントが一つ警鐘のように瞬いていた。

突如生まれたそれは背後からもの凄いスピードでレーダーの中央、つまりこのシッブ目掛けて迫っている。

隕石だろうか？ シップを急旋回させ回避を試みる。しかしそうすると赤い点もまた、少し遅れて進路を変えてバロスに追隨してきた。

これは明らかに人為的な物体——大きさからいっておそらくは小型スペースシップ——に違いない。しかしそうだとしたら、背後のスペースシップはロケット全開で突っ走っているということになる。

「嘘だろ…この辺りは小隕石の密集地帯だぜ……?」

自身も運び屋からキャリアをスタートさせスペースシップの扱いに自信もあるバロスでも、そんな無謀な真似はしない。

「ちっ…いったい何者だ……!!」

この海域には自分と縄張りを争う宇宙海賊や、賞金稼ぎなんかもある。

そんな奴らに競り負ける気もないが、時間を潰され警察の追っ手に囲まれたらさすがにまずい。

「くそ、もう少しだったのによ……」

モニターに後方の映像を呼び出す。迫り来るスペースシップは、既にカメラで捉えられているほど接近していた。

映し出されたのは一人乗りの小型タイプだ。船体はイルカを思わせる流線型で、色は水銀のように艶やかなシルバー。そして尾翼には、見紛うはずもない宇宙連邦警察のシンボルマークがペイントされていた。

「信じらんねえ……あんな狂った操縦を、たかが連邦の犬がやってるってのかよ……」

バロスの驚愕をよそに銀色のスペースシップは瞬く間に彼の船へと並び、通信が入った。《バロスIIレギオン！ こちらはヴィルヴァーナル宇宙連邦警察よ。観念しておとなしく捕まりなさい》

送られてくる声はまだ歳若い女のものだ。そのことにまた、バロスは驚愕させられた。

「ちっ、このアマ……てめえみたいながきに、このバロス様が捕まえられるかよ!!」

そう叫ぶと同時に、ワープ装置のスイッチをONにする。小隕石郡の密集地帯を、ようやく通過したのだ。

ヴンツ——一瞬大きな重力に身体を抑えつけられる感覚に襲われた後、視界に瞬く星々

が点から線へと変わった。

《逃がさないわよッ!!》

通信もその一言を最後に、光速の壁に遮断される。

「くそつたれが、捕まってたまるかよ……このまま逃げきってやるぞ!!」

宇宙連邦海域の境界線は近い。それより先は宇宙連邦の管轄外、越境捜査は許されない。そこさえ越えれば――。

しかしそんな男の思惑は、耳をつんざく大爆音によつて粉みじんになり飛ばされた。

オドオオオオオオウツ!!

この宇宙二度目のビッグ・バンが訪れたかと思うほどの衝撃。灼熱の烈風が艦内を突き抜け、ブロンドの密輸王はコックピットに叩きつけられる。

「なっなんだ……何が起きやがった……!?!」

血を流す額を押さえながらモニターを確認すれば、シップの最後部が大破していた。

「撃たれた……いや、並みの弾で連邦の船がイカれるわけがねえ……だ、誰だッ!?!」

事態を飲み込めぬままふらふらと立ち上がった凶悪犯は、背後に気配を感じ慌てふためき振り返る。

——そこにはいつの間にも侵入したのか、一人の娘がすつくと立ちはだかっていた。

「逃がさない、つて言ったでしょ？」

ふふん、と鼻で笑う。二十歳前後か、紅い瞳が印象的なその顔立ちにはまだ少女の面影が残っている。口調同様その表情にも、生来の気の強さが滲み出ているかのようだ。

髪はプラチナブロンドのツイントール。身体には連邦警察捜査官のトレードマークであるブルーとダークグレーのパワードスーツをまとっている。

レオタードのような形状のパワードスーツは最新型らしく、ボディペインティングと見紛うほど薄手だ。本来は衣服の下に着るものだが、少しでも空気抵抗を減らすためか目の前の娘はスーツ以外何も身に着けていない。

おかげでその引き締まった肢体は隠しようもなく曝け出されていたが、彼女の長身と細身も相まってモデルのような美しいシルエットを見せていた。

「あたしは宇宙連邦警察捜査官、ルーディー・クルーザスよ。脱走および器物損壊の容疑であなたを逮捕します」

女は右手のブレスレットを翳し、連邦警察のホログラムを提示する。

「くそつ、てめえどこから…いや、それよりこの船どうしやがった!？」

こんな小娘どうとでもなる。そうたかをくくったバロスは肝心要のスペースシップを真っ先に案じた。

むにいいいっ…膨れあがった乳肉はルーディー自身驚くほどに柔らかかで、男の指はほとんど柔肉に飲み込まれてしまう。

「んくっ…やめてよッ、汚い手で触らないでッ!!」

吐き捨てるように言い放つも豊満な乳肉の奥では、まるで今まで一度も外気に触れたことのない身体の芯に触れられたみたい鋭い刺激が爆発する。

（なんであたしの身体こんな敏感に…：ううつまずい。あたしが感じちゃってるってこと、こいつらにばれたら…：）

だがそんなルーディーの焦りは、男たちにたちどころに嗅ぎつけられてしまったようだ。

「へへ、お顔も色っぽくなっちゃって。可愛いぜえ捜査官様」

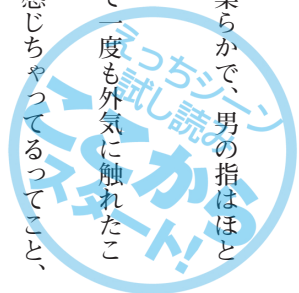
べろおっ…乳をいたぶる男が、りんご色の頬を舐めてくる。

「このおっ、不潔ねやめなさいよオッ!!」

喉が痛いぐらいの剣幕で吠え立てると、さすがの男も一瞬動きを止めた。だが、結局彼女が声を上げる以上は何もできないと見るや、牡獣どもはこぞって爆乳に手を伸ばしてくる。

むにゆいっぎにゆっぎゆにゆううっ…：十近くの掌が乳肌を覆い、乳球を力いっぱい揉み捏ねる。

（くあっ…なんなのこれえっ…：乱暴されてるのにッ、いたくない…：どころか…：すぐっ、き



もち…いい!!)

本来であればかなりの痛みを感じるはずだが、強制的に発情期を迎えさせられたルーデーの乳腺は、与えられた刺激のすべてを蕩けそうなほどの快感と認識させられてしまう。野太い指がうねうねと蠢き柔乳を搾り出すと、乳腺がジンジンと淫熱を孕んだ。肉の内側で滞留していたこそばゆさは今や紛うことなき乳悦へと昇華し、搾乳のたび乳先が蕩けてしまいそうなほどの甘い閃光を瞬かせていた。

「ふうんっ…くうっ…何度言わせるの…：…もうっ、やめ…なさいよオ…：…!!」

堪らない乳悦、しかしそんなものに翻弄されているのを下種どもに悟られるわけにはいかない。

健気な女捜査官はともすれば口をついてしまいそうな甘い牝鳴き声を喉奥に押し込み、精一杯の低音で男どもを威嚇し続けた。

しかし小娘のそんな強がりなど、男たちにはどうの昔に見透かされていたようだ。

「へへ、強がり言っつてられるのも今のうちだぜ」

言いながら、乳房を搾り上げていた男がぬつとその髭顔を乳釣鐘へと寄せた。

荒い吐息が乳輪を掠め、それだけの刺激でも堪らずルーデーはびくんと身を跳ねさせる。

「すけばそうな勃起乳首だぜ…：…たっぷりヨガらせてやるからな」

はむっ…淫猥極まる宣告とともに、乳房を食はまれる。

「んあっ…やだ馬鹿つなに吸ってんのよおっ!! あふっ…ちよっ、こらそんなとこ嘯むなあああっ!!」

ねっとり絡みつく粘膜の熱と感触は、指の刺激とは段違いのおぞましき。なのに乳先はジンッジンッと火の瞬くがごとく熱を放ち続け、全神経がひとりでに乳先へと集中してゆく。

女捜査官の箠絡を予言しただけあつて、その男の乳責めは恐ろしく巧みであった。

唇は乳輪のほんの少し外縁を啣えて吸い上げ、ぷっくりと膨れた乳輪を前歯でもってカリカリと刺激する。

舌先も休んではない。舌腹で乳豆を包むように舐めあげ、ぐりぐりと円を描いて扱き立てるのだ。

「うあっ…へん、た…い…もおおっばい放しなさいよおっ…ふやあつ、やめろっちくびのさきそんなにいっぱいはいほじくるなああっ!!」

乳粘膜がチリチリと焦げるような感覚。時折先っぽだけを啣えられ力いっぱい吸いつかれると、切ない気持ちちが胸から溢れて思わず甘い喘ぎを漏らしてしまう。

「フン、ちよつと乳しゃぶられた程度で鼻の下伸ばしてやがるくせに。どちらが変態だよ」
かにゆうっ。

「きゃひいいんっ!!」

こりこりとした勃起を甘噛みされて、素っ頓狂な悲鳴を上げてしまう。

(だめよっ、声なんて上げたらいつら喜ばせるだけ…)

そう思つて必死に唇を結ぶも、それまで放置されていた左乳首をキュツと摘まれると、

「んひゃあつ、やつそんな力いっぱいひっぱらないでよおっ!!」

決意はすぐに瓦解して、情けない哀願が考えるより先に口を突いた。

「へへ、こつちもガチガチにおつ勃たててやがるな。どおれ…」

くにゆっ、くにゆうつ。

転がすように揉み捏ねられ、引つ張るように扱かれる。ぎゅうつ、と抓るように捻られるは、乳房へと埋め込むようにぐんによりと押し潰された。

「うくんっちくびいいっ…あ…あ…ひっ、そこばつかいじるなああ…おんなじとこばつか、もおやめろおお…」

どんなに叫んでも男が責めをやめるわけもない。親指と人差し指、男のたった二本の指の間でルーディーの乳突起はいいように弄ばれ、そのたび女捜査官は身も世もなく喘ぎ続けるしかなかった。

「随分気に入ってくれたみたいだな。おい、そろそろ捜査官殿にとっておきのやつを見せてやれ」

「了解しましたボス：おいお嬢ちゃん、感じすぎてお漏らししないよう元栓しつかり締めてけよ」

バロスの命を受けて、乳房を黴っていた男が背後に回った。だがようやく舌による責めから逃れて一息つくまもなく、左右の乳房が根元から搾るようにすくいあげられる。

「くうっ、これ以上あたしをどうしようって……」

「言っただろ、とっておきのやつを味わわせてやるのさ」

ぎゅにいつ!! 男の指が乳肉深くにめり込んだ。

「はうううッ!! ちよっ…加減つても知らないの……!!」

思わずそう抗議してしまうほどに、改めて加えられた握力は先ほどまでの比ではない。

今までは乱暴だったとはいえ最低限の手加減みたいなものがあった。だが今度の搾乳は本気で彼女の乳房を潰してやろうとでもいうように、まったく遠慮が見られない。

まるでものでも扱うように、パン生地を捏ねる職人のように容赦がない。乳房をちぎりとられてしまうのではと、半ば本気で恐怖したほどだった。

しかし何よりおぞましいのは――。

「うぐっ…くっ…ううつつんっ…ふぁっ…やつ、やめ…て、よおっ」

喉から漏れ出す鼻にかかった牝の鳴き声…：暴行を受けてなお、彼女の肉体は鋭い喜びに打ち震えていた。

（なんでなのっ!!　なんでこんなひどいことされて、あたし気持ちいいのよっ!!）
 乱暴されて悦ぶ自らの浅ましさに愕然としながらも、与えられる乳悦は彼女の冷静さを
 力づくで剥ぎ取ってゆく。

乳腺が焦げるように熱い。ジンッジンッと胸の奥で桃色の火花が瞬いているかのようだ。
 むにいつ、むにゆぎいつ…男はリズムカルに乳房を搾り、そのたび燃えるような刺
 激が乳奥へと送り込まれる。乳腺だけだったあの焦げるような痺れは今や乳房全体へと伝
 播して、豊満にされた柔乳全体が壊れたように切なく疼き狂っていた。

「うあっ…あっ、ああう…あ、あたしの胸なんかへんよ…!!」

自らの肉体の異常を察し、ルーディーが戸惑うようにそうこぼす。こころなしか胸が一
 段と張り詰めてきた気がする。何かが内側から押し上げてくるような感触が乳房を襲う。

「いいじゃねえか、ヘンになっちまえよ？　ほら、ほおらほら」

きゆきゆきゆううっ!!　男の指がまたも乳首を摘みマツチを擦るように激しく摩擦を繰
 り返す。

「ひいひいいつんあつやだそれえつ…あつあああ…な、なんかくるつ、むねの奥のほおか
 らなんか…ああつ…あああああ——つつ!!」

びしゅうううう——ツツツ!!

乳先が破裂するような激感とともに視界が白く染まる。

そう言いながら、唐突にバロスが腰を止めた。

「ひあつ!! なんれつ、やめつやめちややらああつ!!」

すんでのところでお預けを食らわされ、イヤイヤをするように激しくツイントールを振り乱す。白桃尻はぐりんぐりんとこの字を描き、膣口はキュンキュンと鳴いて唾えた男根にしゃぶりつく。

「まあ聞けや。さっきのホルモン剤なんだが、排卵誘発剤としてもかなりのものでよ。打つて24時間以内に中出しされりゃ100パーセント受精する——つてのは、まだ教えてなかつたよな?」

「ひえあつ!! んっひっつい……そ、それつてええ……」

桃色霞に閉ざされかけたルーディーでも、その言葉の意味は理解できた。

(このままされたら……あ、あかちゃん……できちゃううう!!)

妊娠の恐怖は、淫欲にただれきった女捜査官のにほんの一寸けらの理性を呼び戻す。父なし子を、それも犯罪者の子を宿した孕み腹で後ろ指を差される自分の姿が脳裏によぎった。

「さつきも言ったが俺は紳士的な方でよ。さすがに合意もねえのに孕ませるのは気が引けるぜ……そこで」

男はそれまでがっしり掴んでいた牝腰を離した。

「このまま続けるかここでやめるか。ルーディー、てめえの好きにしていぜ」

ペニスはその三分の二が膣首から抜かれている。彼女があとほんの少し腰を引けば、龟头は抜け去るだろう。

(妊娠…やだ、あかちゃんだけは…やだああ…)

恐怖心が腰を退かせる。しかしあと少しで抜けると思った瞬間、亀頭のエラが膣壁をえぐった。

「ひゃうんつつ!!」

バチバチイッ!!

膣口で爆ぜた快感電流。牝本能を呼び起こす刺激を前に、まともな思考はあつという間に吹き飛んでしまう。

ぐいいいっ!!

「んあつ、あつふ…あああんつつ!!」

娘の細脚はひとりでに男の腰を引き寄せ、肉槍を再びぬかるみ深くへと誘い込んでいた。

「ふあひつ、あひつ…ひやらっこしつ、かつてにいいつ…とまらつ、な…ひいつひぎいい…!!」

ぐちゅぷつぬちゅぶふうつ…子宮口を打たれる激感に腰が淫らに飛び跳ね、気づけば彼女は卑猥な腰振りを再開してしまう。

「くく、そんなに俺のガキが孕みてえかよ…嬉しいぜえ…お望み通り、たっぷり注ぎ込んでやるよ!!」

ズツズツズツズツ…女捜査官の陥落を見て取ったブロンドの悪魔は再び腰を捕まえ、削岩機のごとき勢いで腰を打ちつける。

「あへえっ、いっだめっ…あかちゃんできちやううっ…だめっだめええんつつっ!!」

言葉とは裏腹に女の脚は更に強く男へと絡みつき、牝腰はレゲエダンスのように卑猥なリズムを刻んで抽送をやめない。

「とことんいやらしい牝豚だぜ…ほおらこれで…イッチまいなあっ!!」

びゅるっびゅっつびゅくっびゅきゅっびゅびゅびゅうううう——つつっ!!

「きゃふうううんっ!! イクうっあっ赤ちゃんんッ受精しながらイクッイクウウウウ——ツツツ!!」

塊のようなスペルマを子宮口へと叩きつけられて、全身を揺るがす衝撃とともに宇宙の果てまで打ち上げられる。

待ちわびていた膣絶頂の法悦に意識が焼ききれ、全身の細胞が快感のスパークに弾け飛び四散した。

尻を貪る怪異も宿主の絶頂に感応してブルルッ!! と蠕動し、内臓をもがれるような衝撃を浴びながら立て続けのオルガスムへと追い立てられる。

女体の激しい身悶えに爆乳が暴れ、刺激を受けた乳腺がまた乳汁を噴きあげる。全身性器の牝牛捜査官は、そんな噴乳の快感でまた乳頭絶頂を極めてしまう。

「あ……ひええ……ふひっ……ひい……んっっ」

結局ルーディーは十分近くの間、全身のどこかしらで繰り返し絶頂し続ける肉悦地獄に晒される羽目となった。すべてを終えた彼女の全身は筋肉が弛緩しきり、乳房からはなおもちろちろと乳液をだだ漏らしている。結合部からは本気汁と小水の交じりあつた牝液が、たらたらと糸を引いて床にシミを広げていた。

「いひっ抜いちややああっ……いいのおおっ……これっ……おま○こもっつつ、もつとおおおっ……!!」

ペニスを引き抜こうとするバロスにすがるように、駄々っ子のような涙声でそう懇願する。連邦捜査官としての責務も、来るべき懐妊の恐怖も。もはやセックスのもたらす悦びの前ではゴミのようなものだった。

「クク、完全にチンポ奴隷だな。可愛いぜえ……だが俺はっっかり楽しんでちゃ悪いからな。ほらお前ら、捜査官殿のお相手をして差しあげろよ」

ボスの許可を受けて、それまで欲情の視線で視姦していた部下たちが一斉に群がった。豊満な乳肉に、張りのある桃房に、そして咲き乱れる肉華へと。十本以上のペニスがルーディーの肢体へと襲いかかる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>